



▼ イン트로ダクション

永遠と広がる暗闇を
一人ぼっちで旅した彼女。
永遠と広がる大海原を
一人ぼっちで彷徨うアナタ。

二人の旅人は、
手を取り合って帰還する

エモクロア TRPG 「二人ぼっちの帰り道」

▼ 導入

広大な大海原で、たった独りで遭難してしまった共鳴者。見えるのは、青空と水平線のみ。近くを通る船も、目印になりそうな島も、飛び跳ねる魚も、空を飛ぶ渡り鳥も見えない。ここには何もない。ここには、共鳴者しかいない。

成す術もなく途方に暮れていたところ、空から降りてきたのは天使のような少女。彼女もまた、独りで旅をしていたのだという。

孤独な二人の旅人は、どんな物語を紡ぐのか。

▼ ダイスタス・コモンズ



▼ シナリオ情報

物語の舞台…現代・太平洋の海上

プレイ人数…共鳴者 1 人

プレイ時間…1.5～2 時間

共鳴者…継続あり

過去の設定や通過してきたシナリオがあればなお良し

共鳴者の過去や、目標や夢について問われるシーンがあります。

ロールプレイ重視・しっとりしたシナリオです。

▼ ハンドアウト

共鳴者は**大型客船に乗っている**。大型客船は太平洋を航行している。

(DL が可能であれば、船の条件を自由に変更して良い。遊びやすく改変すること。)

船に乗る目的(日本への帰国や海外への留学・旅行など^{*1})を決めておくこと。加えて共鳴者に生きる目的や叶えたい夢などがあると望ましい。

^{*1}シナリオコンセプト的には、日本への帰国が最もマッチしますが、ロール次第では他の設定でもエモくなるかもしれません。

シナリオ核心情報

▼舞台「ポイント・ネモ」

世界の大洋で最も陸地から離れた地点。ピトケアン諸島のデュシー島、イースター諸島のモツ・ヌイ、南極のメイハー島から、それぞれ約2700km離れた地点のことを指す。人類居住地から地球上でもっとも離れていることから、“世界で最も孤独な場所”である。加えて、陸地から離れていることと、海流の影響から有機物が乏しく、生物が著しく少ない場所でもある。

居住区域から隔絶された場所であることから、不要となった人工衛星を落下させる目標「人工衛星の墓場」として活用されている。水深約5000mの海底には、数百もの人工衛星の残骸が眠っているとされている。

因みに、不要となった人工衛星を宇宙に残さず落下させる理由としては、スペースデブリ(宇宙ゴミ)を減らすため。秒速3~7kmという超高速で飛び交うデブリが人工衛星や宇宙ステーションに衝突すれば、甚大な被害が発生する可能性がある。直径5~10mmのデブリと衝突することは弾丸を撃ち込まれるに等しい威力。

▼怪異「彗星探査機『つばめ』の魂」

彗星探査機「つばめ」は10年前に日本から打ち上げられた。彗星に着陸し、彗星の一部を回収、地球に彗星のサンプルを持ち帰ることがミッションであった。

「つばめ」は10年にも及ぶ宇宙旅行から地球に帰還。大気圏突入前にサンプルを封じた金属製のカプセルをポイント・ネモめがけて発射した。その後、「つばめ」本体は大気圏突入の高熱により燃え尽きてしまった。燃え残った残骸は海底に散らばっている。

カプセルは予定通り、ポイント・ネモに落下した。しかし、着水時に誤作動を起こしてしま

う。本来はエアバックが膨らみ海面に浮かぶはずが、膨らまない。金属製の重いカプセルは水深5000mの海底に沈んでしまう。海中に沈んだことにより、カプセルに付属している発信機からの電波は地上に届かない。カプセル回収は絶望的となってしまった。

地球に帰還し、燃え尽きた「つばめ」だが、多くの人々に愛されていた。探査機の作成から打ち上げ、帰還までのミッションには多くの人が携わっている。彼らは10年もの間、「つばめ」に向き合い続けてきた。我が子のように愛着を抱いた「つばめ」を大気圏突入させることは、複雑な心境で行われる最後のミッションだ。そんな彼らの感情が「つばめ」の燃え残った残骸に共鳴、魂が宿ることで怪異となった。

彼女はミッション遂行のため10年間、宇宙で孤独な旅を続けた。管制から聞こえる電波だけを頼りに、独りでミッションを全うした渡り鳥であり、旅人である。

そんな彼女は、偶然にもカプセル落下地点付近で遭難していた共鳴者に出会う。地球に帰還したが、海中に沈んだカプセルを還せなくなった彼女。遭難し、我が家への帰還が絶望的となってしまった共鳴者。二人は手を取り合い、帰還というミッション遂行へ向けて動き出す…。



共鳴感情：[希望(理想)] [孤独(傷)]

▼ シナリオ専用共鳴表

このシナリオでは、以下の共鳴表を使用する。
共鳴判定の結果がトリプル（極限成功）以上の
場合、1D6 を振ってハウリング反応を起こす。

1. 孤独なる旅人

共鳴者はどこことなく、孤独を感じる。今までの人生で経験した中で、最も孤独だった場面を思い返す。

共鳴者はこのシナリオ中、**共鳴感情：[孤独(傷)]**を所有する。

2. 希望追う旅人

共鳴者はどこことなく、希望を抱く。自分が人生で成し遂げたいことや夢を思い出す。その希望を叶えるため、前に進もうとする。

共鳴者はこのシナリオ中、**共鳴感情：[希望(理想)]**を所有する。

3. スターシーカー

共鳴者の脳裏に、真っ暗な宇宙空間を旅する幻影が浮かぶ。自分が目指す星は遥か先だが、旅を成し遂げた果てに得ることができる“何か”に強く魅かれる。

共鳴者はこのシナリオ中、**暗闇で調査系技能の判定を行う際、判定値が1増加する。**

4. 極限状態

共鳴者は遭難という極限状態から、身体のリミッターが一時的に解除される。全ては生きて帰る為に。

共鳴者はこのシナリオ中、**全ての技能の判定値が1増加する。ただし、共鳴判定の判定値も1増加する。**

5. 旅への欲求

共鳴者は遭難という状況から帰還した後、旅に出たいと願う。今回は不幸な出来事に巻き込まれてしまったが、旅路の果てに何かを得ることが出来ると思う。

今自分が置かれている遭難という状況すらも、乗り越えた先には何かを得られるはずと信じる事が出来る。

6. 声

共鳴者の脳裏に、真っ暗な宇宙空間を旅する幻影が浮かぶ。たった独りで旅をしているはずだが…。何処からだろうか、声が聞こえる気がする。遠い何処かから、自分を想って声援を送ってくれている。

共鳴者は、自分を想ってくれている人(友人・恋人・家族など)を思い返す。その人のためにも、帰らなくてはならない。

シナリオ本編

- 以下は、DL 向けの情報である。
- シナリオ本文のロールは、あくまで一例である。下記の情報を参考に、自由にアレンジして演出やロールを行うと良い。
- 判定に関しても、同上である。適宜、判定を追加すると良い。

シーン 1：衝撃

ここは太平洋。日本からは遙か沖合の洋上だ。永遠と広がる水平線と、永遠と広がる青空。快晴で波は穏やか。爽やかな風が撫でるデッキで、共鳴者は海を眺めている。

★ DL 向け情報

船が進む先は何処だろうか。共鳴者はあと少しで我が家に帰れるという安心感に浸っているのか。あるいは新天地への希望を抱いているのか。はたまた、何かから逃げる為に乗船しているのか。状況や感情を、共鳴者にあわせて描写できると良い。

共鳴者が甲板に立っていると。突然、ドーンという重低音が鳴り響く。地響きかと思った瞬間、下から強く突き上げられるような衝撃が共鳴者を襲う。甲板から跳ね飛ばされ、共鳴者の身体は宙を舞う。重力に引き寄せられ、海面に叩きつけられる頃には既に、共鳴者は意識を失っていた。

シーン 2：青い世界

気がつくと。共鳴者の目の前に青空が広がっている。身体は仰向けになって水の上に浮かんでいる。奇跡的に溺れず助かったようだ。

共鳴者が周囲を確認すると、すぐ近くにオレンジ色の救命ボートが浮かんでいる。恐らく、船全体を突き上げるような衝撃で、共鳴者と一緒に船から落ちてしまったのだろう。ボートのヘリには縄梯子があり、乗り込むことができる。ただ、ボートの上には誰もいない。

改めて、周囲を見渡すとそこは一面の大海原。ぐるりと見渡しても、水平線だけが永遠に広がっている。

〈*知覚〉〈観察眼〉等の技能で周囲の景色に判定を行うと。周囲の海上には自分以外の生き物は一切いないことが分かる。水面から跳ねる魚も。空を飛ぶ渡り鳥も。何もいない。見えるのは水平線のみ。聞こえるのは波の音だけ。此処には共鳴者以外に誰もいないのだ。

▼共鳴判定

(強度 4 / 上昇 1) / ∞ 共鳴感情:[孤独(傷)]

共鳴判定に成功した場合。共鳴者は孤独な海にたった一人で取り残されたことに、強い孤独感を覚える。

ボートの上を確認すると。いくつか調べられそうなものが積みこまれていた。無線機・ハンディ GPS・海図・海中の 4 か所を調査可能。

① 無線機

黒い無線機らしき機械。SOS と記されたボタンがある。押すと、一定のリズムで電波を発信し始めた…が、すぐにノイズまみれの音に代わる。ガリガリ…ザーツという音が鳴り響く。上手く動作していない。

② ハンディ GPS

トランシーバーのような形状をした、携帯型の GPS だ。液晶画面に地図が表示されている。GPS は人工衛星から直接電波を受信している為、海上でも使用できる。現在地を確認すると、南太平洋上の中心を示した。周囲に島は全く無い。

③ 海図

防水加工が施された海図。先程の GPS で表示された場所を開くと、今いる海域の説明が記載されている。

「ポイント・ネモ」

南半球・南太平洋の海上に位置している。ピトケアン諸島のデュシー島、イースター諸島のモツ・ヌイ、南極のメイハー島から、それぞれ約 2700km 離れた地点のことを指す。人類居住地から地球上で最も離れている。南太平洋還流の影響から有機物が乏しく、生物が著しく少ない場所でもある。

④ 海中

〈ダイブ〉などの技能を用いて、海中の調査を行うことができる。判定に成功すれば、水底が全く見えないことがわかる。目を凝らして海の底を見ても、暗闇が広がっているだけ。一体どれほど深いのだろうか。(海図に対して〈マッピング〉などの技能で調査に成功すれば、今いる地点の水深が 5000m だということが分かる。)

なお、海中の調査で技能に失敗すると、以下の共鳴判定が起きる。

▼共鳴判定

(強度 4 / 上昇 1) / ∞ 共鳴感情:[恐怖(情念)]

共鳴判定に成功すると。永遠と広がる海の深さを見て、身体がすくむ。

★ DL 向け情報

以上 4 か所での調査は、ダイスゲーム的な側面よりも、共鳴者に孤独や遭難による絶望などを感じさせる側面を重視している。

調査技能に失敗しても、「広大な大海原が広がるのみで、何も見つかりませんでした。」
「海図を見ても、分かるのは周辺に島が全くないことだけです」等の表現で情報を示す。

共鳴者が 4 か所全ての調査を終えたら、以下の描写を行う。

共鳴者が調査を終えると。既に日は傾き始め、周囲が茜色に染まってゆく。海面に夕日が乱反射する光景は美しい。しかし、この光景が終われば夜が降りてくるのだ。遭難という成す術のない状況の中で途方に暮れる共鳴者を置き去りにして、太陽は沈んでゆくのだ。

シーン 3：不思議な少女

気がつけば黒が、あたりを埋め尽くす。周囲に人工の明かりが一切存在しないこの場所。完全なる闇夜に目が慣れてくる頃、ふと天井に空いた穴を見上げると。そこには満天の星空が見えている。思わず船から体を乗り出して外を見る。天の川までくっきりと見える星空だ。

風は静かで、ほとんど波が立っていない。真っ暗な海に星空が鏡のように写っている。暗い宇宙と暗い海の境界線が分からなくなっている。

▼共鳴判定

(強度 4 / 上昇 1) / ∞ 共鳴感情:[孤独(傷)]

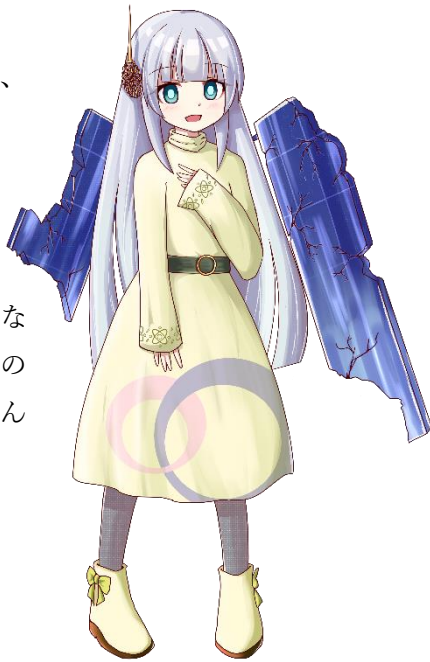
共鳴判定に失敗した場合。夜の海上で一人ぼっちで彷徨うこの状況に、孤独感を覚える。

共鳴判定に成功した場合。共鳴者は強い孤独感を覚える。宇宙と海の境界線が分からなくなるこの場所。まるで、広大な宇宙にたった独りで放り出されたように感じる。

孤独に海上を彷徨っている共鳴者とは関係なく、輝きを放つ星を見ていると…。突如、流れ星が目に入る。ただそれは流れ星にしては明るすぎる。輝きを増し、周囲が日中のような明るさになる程の煌めきを放つ。その一筋の煌めきは雲を、霞を突き抜け、一直線に落ちてくる。閃光で視界が白く染まり、何も見えなくなる。思わず目を閉じた共鳴者の近くで、ドーンという大きな轟音の後、ブクブクブク…と何かが沈む音がした。

周囲は静寂に包まれる。共鳴者が恐る恐る目を開くと。ボートの上が、ほんのりと明るくなっている。共鳴者が振り返ると…。オーラのような後光を放つ、可愛らしい少女が立っている。銀色の髪をなびかせ、アンテナのような金属製の髪飾りをつけている。金色のドレスのような服はどこか、金属質な輝きを放っているようにも見える。そして何よりも目立つのは、背中からは不思議な形状をした青い翼が生えている。

まるで天使のような姿の少女だが、いつの間にもボートに乗り込んだのだろうか。



▼共鳴判定

(強度 7/上昇 1)/∞共鳴感情:[希望(理想)][孤独(傷)]

共鳴判定に失敗した場合、目の前の少女に対して親近感を覚える。共鳴判定に成功した場合、目の前の少女に対して親近感を覚える。遭難した共鳴者と同じように、孤独な存在であるような気がする。

共鳴者の後、少女が話しかけてくる。

「ただいま！ やっとこの星に帰ってこれたー！」

共鳴者の質問や返答に応じてロールプレイを行う。以下、想定される質問。

◆ 貴女は誰？

「つばめって言うの！」

◆ どこから、どうやってここに来た？

「私は…空から来ました！」

「海の上で降りる場所がなかったんだけど…
ちょうどアナタがいたの！」

◆ どうしてお空に行っていたの？

「お使いから帰ってきたの！」

「私、もともと地球で生まれたんだけど…
お使いのためにお空に行ってたの。」

「お目当てのものは取れたから、持って帰ってきた！」

◆ お使いって何？

「お星さまの欠片を持って帰るの！」

「お空にはね、小さなお星さまがいっぱいあるんだよ。お日様とか、お月様とか、この星よりもずっと小さいの。」

「それでね、石でできていて、灰色で、穴だらけなの！」

「私が行ったお星さまは、旅をしているの！ “すいせい”って言うみたい！」

◆ お星さまの欠片を見せてほしい

「お星さまの欠片…落としちゃったの！」

「せっかく持って帰ってきたのに！」

つばめは泣き出してしまう。欠片についてこれ以上は聞けない。

◆ 姿について

少女に〈観察眼〉などの技能を用いて成功すると。服や翼が黒く煤けており、焼け落ちてしまっている箇所があることに気がつく。

◆ どうして服が煤けているの？

「うーん…ここに来るのに燃えちゃったの。」
「お空とこの星の間ってね、すごく暑いんだよ。火が着いちゃうの！」

◆ その翼は？

「これ？ お空を飛ぶのに必要なんだよ！」
「これで、お日様の力を分けてもらえるの。」
「でももう、遠くまでは飛べなくなっちゃった。翼、壊れちゃったみたい。」

翼に対して〈*調査〉〈*知識〉等の技能を用いて成功すると。翼が太陽光パネルのような形状をしていることに気がつく。なお、つばめに「太陽光パネル」という言葉を出して尋ねても、首を傾げるだけである。

十分にロールプレイが済んだところで、つばめは思い出したかのように尋ねてくる。

「そういえば…アナタはどうしてここにいるの？ こんな誰もいない場所で…」

共鳴者が遭難していることを伝えと。

「それは大変だね…。お家には帰れそうなの？」

「どうしよう…誰かに知らせないと！ どうしよう…もう私は飛べないし…」

あたふたしながら考えるつばめ。しばらくすると、何かを思いついたかのように手をうち、口を開いた。

「そうだ…！ 私のお星さまの欠片だ！」

「お星さまの欠片をね、大きなカプセルに入れてあるの！」

「でね、発信機っていうのかな？ カプセルには発信機がついているの！」

「カプセルを拾ってもらうために、私はここにいるよーって声を発信機から出しているの！」

どういうことかは解らないが、彼女がお使いで持ち帰った星の欠片が入ったカプセルには発信機がついていて、誰かが探しているようだ。

「でも…カプセルを間違って海の底に落としちゃったから…。ここにいるよーって、お声が届かなくなっちゃったみたい…」

★DL 向け情報

カプセルにはエアバックが付いており、本来は海面に浮かぶはずであった。しかし、誤作動を起こしてエアバックは開かず、カプセルが海底に沈んでしまう。水深 5000mの海底からでは、カプセルから発される電波は届かない。カプセルを海面に出すことが出来れば、電波を受信した彗星探査機「つばめ」プロジェクトの回収チームが、ここまで辿り着くことができる…ということである。

「ねえ、一緒に海の底まで拾いに行かない？ カプセルがボートにあれば、お声が届いて取りに来てくれるはず！」

「君もお家に帰れて、私もおつかいを終わらせることが出来る！ やってみたい？ やってみよ！ 私のチカラ、貸してあげる！」

訳も分からずにか。あるいは藁にも縋る思いいか。共鳴者がつばめの申し出を承諾すると。つばめが大きくうなずき、共鳴者に手をかざす。

▼共鳴判定

(強度 8/上昇 1)/∞共鳴感情:[希望(理想)][孤独(傷)]

つばめの手から放たれる黄金の光、彼女のチカラが共鳴者に注がれる。金色のオーラは球形になり、共鳴者を包み込む。まるで強靱なカプセルに護られるかのようだ。オーラは徐々に共鳴者の身体に吸い込まれ、浸透してゆく。身体の奥が暖かくなった気がする。

※なお、ここの共鳴判定で失敗した場合。つばめが「あれ？ うまく行かないなあ。もう一回させて！」と申し出る。成功するまで判定を行う。

「これで大丈夫だよ！ 真っ暗なお空を旅するための私のチカラ。君に宿ったはず！ 真っ暗な海にだって潜れるよ！」

「さ。行こう！ そのチカラもずーっと使えるわけじゃないから…。」

シーン4：暗闇へ

意を決し、共鳴者が海に入ると。不思議なことに、水中でも呼吸ができることに気がつく。また、冷たい海に潜ったはずなのに、寒さを感じないことが分かる。これこそが彼女が貸してくれているチカラなのだろう。共鳴者に続いて、つばめも海中に入る。共鳴者の手をそっと握り、話しかけてくる。

「一緒に行こ。…ホントは私も、少し怖いんだ。」

「でも大丈夫。私はお空に行って帰ってきたんだよ!? アナタを海の底まで連れて行って、帰るなんて簡単…なはず！」

彼女に手を引かれ、共鳴者は深い海の底へと潜り始めた。どんどん沈んでゆくにつれて、周囲が暗くなってゆく。水深 200m を過ぎると、陽の光が全く届かない暗闇となる。ここは深海、周囲はまさに暗黒というべき暗さ。上も下も右も左も黒一色。見えるのは、灰かに輝くオーラに包まれたつばめの姿だけだ。

▼共鳴判定

(強度 5 / 上昇 1) / ∞ 共鳴感情:[孤独(傷)]

共鳴判定に成功した場合。見渡す限りに広がる暗闇に、共鳴者は広大な宇宙を想起する。何もない空間、黒一色の世界の中を孤独に進んでいるが、目指す目的地は遥か深淵で、考えると気が遠くなりそうだ。

ふと、共鳴者の手を握るつばめが口を開いた。「地球からお星さまに行くのってね、すごく大変だったの。」

「行きと帰りで 10 年ぐらいかかったよ！」

「ちょうど今みたいな感じ。真っ暗で何もない場所を、ずーっと進んでゆくの。」

「一人で寂しかったけど…頑張った！」

「だって、わたしのお使いの帰りを待っていてくれる人がいっぱいいるんだもん！」

「お星さまの欠片って凄いいんだよ！ 調べたら、命の秘密が分かるかもしれないんだって！」

「アナタにも命があるでしょ？ この星の最初の命がどうやって生まれたかが、わかるかもしれないの！ 遠いお空から、命の元が旅してやってきたかもしれないんだって。」

「だから、お星さまの欠片を届けなきゃって！ 頑張ったんだよ！」

つばめが喋る間も、二人は静かに沈んでゆく。聞こえるのはつばめの声のみ。見えるのはつばめの姿のみ。感じられるのはつばめの手のひらの感覚のみ。彼女がいなければ、此处は完全な暗闇と虚無が支配するのだろう。つばめはそんな孤独で真っ暗な世界を、10 年も旅していたのだ。

「アナタは独りで旅したこと、ある？ 独りで頑張ったことって、ある？」

★ DL 向け情報

共鳴者のロールプレイに応じて、つばめは言葉を返す。共鳴者の設定の深堀り・共鳴者の生きがいや夢の再確認…などになるような会話ができれば良いだろう。

「私はお使いの為に頑張ったけど…アナタは何のために頑張ったの？ 何のために頑張るの？」

どれほど潜り続けたらだろうか。眼下に砂地が見える。海底にたどり着いたのだ。底に足をつけると、つばめが自身の手のひらの上に光の玉を作り出した。その光を掲げ、つばめが周囲を照らし出すと。辺り一面の砂原が広がっている。

生き物や海藻の姿は全く無い。まるで砂漠のような光景だった。ただ、砂漠と違う様子も見える。あちこちに、何かが埋まっている。金属質な煌めきを放つ何かが、辺り一面幾つもの、砂から飛び出ているのだ。

埋まっている何かのうちの一つを共鳴者が調べると。何らかの機械の一部であること分かる。
〈*調査〉〈観察眼〉などの技能判定に成功したのであれば、それがかなり精密にかつ、頑丈に作られたものであると分かるうえ、至る所に煤けて燃えた形跡があることが分かる。

▼共鳴判定

(強度 5/上昇 1)/∞共鳴感情:[孤独(傷)]

共鳴判定に成功した場合。共鳴者は思わず、欠片にそっと手を伸ばしてしまう。欠片に触れた瞬間、広大な宇宙空間に浮かぶような情景が見える。眼下には真っ青な地球が見える。この金属片はつばめと同じように、宇宙空間を旅していたのだろうか。

★ DL 向け情報

周囲に散らばっている残骸は、役目を終えた人工衛星や宇宙探査機の残骸だ。ポイント・ネモは不要となった人工衛星を落下させる目標「人工衛星の墓場」。水深約 5000m の海底には、数百もの人工衛星の残骸が眠っているとされている。

欠片を拾い上げたつばめが、口を開いた。

「これね、私の仲間のカラダなの。」

「私達はお空へお使いに行って…。役目が終わったらこの星に帰る。帰るときにカラダは燃え尽きちゃうの。」

「でも、少しは燃え尽きずに残ることがあるんだよ。これが誰かはわからないけれど…これは私の仲間のカラダなの。」

「多分…私の一部もカプセルも。この海の底の何処かに沈んでいるはず。」

「早く探さないと。カプセルは水の底でいつまで壊れずにいるか分かんないし…。私が貸してあげているチカラも、ずっとじゃないからね。」

つばめが再び共鳴者の手を取り、海底を歩いてゆく。つばめに応じて、共鳴者はカプセルを探し求めて進み始める。

シーン 5：この星の最奥

彼女について暫く歩くと。奇妙な光景が広がる場所にたどり着いた。砂地はいつの間にか、黒い岩場へと変わっている。周囲には、柱状に伸びた黒い岩が無数に生えている。黒い石柱からは真っ黒な水が勢いよく吹き出している。そしてなによりも、周囲の水温が高い。海底を形作る黒い岩に触れてみると暖かく、岩盤の下にはマグマが通っているのだろう。

★ DL 向け情報

黒い柱は、深海に生成される熱水噴出孔(チムニー)と呼ばれるもの。地熱で熱せられた海水が地面から吹き出している。この海水は深海の水圧の影響から、100℃を超えても気体にはならず、400℃を超えることもある。海水が黒い原因は、重金属や硫化物などを含んでいるからである。

つばめは周囲を見渡しながらか鳴者に告げる。
「あの黒い水、絶対に触っちゃダメだよ！」
「あれ物凄く熱いから！ 私の…センサー…？ なんとなくそう感じるの！」

熱水が吹き出す柱を掻い潜りながら、か鳴者はカプセルを探す。地熱によって周囲はじりじりと温度が上がっているのが伝わってくる。

熱さに耐えながら、しばらく探すと。か鳴者は黒い岩盤の上に横たわる、直径 10cm ほどの金色に輝くカプセルを見つける。幸い、カプセルの周囲には熱水を吹き出す岩はなく、カプセルを拾い上げることができる。その様子を見て、つばめが話しかけてくる。

「あった！ 見つけてくれてありがとう！」

つばめは小躍りするように喜んでいる。そんな彼女の足元、カプセルが落ちていた周囲にも、無数の金属片が落ちている。

金属片に対して、〈観察眼〉〈鑑定〉等の技能で調査を行うことが出来る。判定に成功すれば、か鳴者はアンテナのようなパーツを発見する。煤けてボロボロで、途中で折れてしまっている。アンテナの根元に当たる部分には、幾何学模様のような金属パーツが付いている。そのパーツは、つばめが頭につけている不思議な髪飾りそっくりだとわかる。

★ DL 向け情報

カプセルの周囲に散らばっている金属片は、彗星探査機「つばめ」の残骸だ。これらの残骸に「つばめ」を想う人々(天文ファン・つばめを制作した人、プロジェクトに関わる人など…)の思いがか鳴しとことによって、か鳴者の目の前に怪異としての「つばめ」が存在している。

★ DL 向け情報

前述の技能判定で、彗星探査機「つばめ」のアンテナを発見しているのであれば。か鳴者はそれを拾い上げ、持ち帰ることが出来る。もし持ち帰れば、シナリオ終了時の描写と処理に変化が生まれる。

なお、アンテナをつばめに見せても、
「ん…？ 私の髪飾りそっくりだね。」

と言葉を返すだけである。つばめ自身は、カプセルの周囲に散らばっているのは自分自身の残骸であると気がついている。ただ、か鳴者にはバレたく無いと思っている。

シーン 6：帰還

「さ、海の底から帰ろうか。お星さまの欠片も、無事に見つけてくれたから。」

つばめがそう言った瞬間だった。ゴゴゴ…という地響きが周囲から聞こえてくる。黒い石柱から黒い水が勢いよく吹きあがる。

か鳴者の手をつかみ、海底を蹴りだして飛び上がった。か鳴者が海底を見ると、至る所から黒い岩が吹きあがり、割れた海底から真っ赤に染まるマグマが湧き出てきている。海底火山の噴火だ。

「飛び上がるから。捕まっていね。」

つばめの背中の翼から、眩い閃光が放たれる。ロケットが宇宙へ向けて飛び立つかのごとく、速度を上げて上昇してゆく。強烈な G がか鳴者の身体にかかる…。

気がつけば、か鳴者は海面にたどり着いていた。夜明けが近づいているのだろう。東の空は薄っすらと黄色に染まっており、藍色の西の空と美しいグラデーションを生み出している。

つばめの方を見ると、彼女は空中に浮かんでいた。ただ、今までとは様子が違う。彼女の翼が燃えているのだ。青い翼はパチパチと音を立て、火花を撒き散らしながら徐々に崩れ落ちてゆく。同時に、徐々に彼女の姿が徐々に薄れる。銀色の髪も、金色の輝く服も、可愛らしい顔も、向こう側が透けてゆく。そんな彼女は悲しそうな笑顔を浮かべながら、共鳴者に声をかける。

「見ていたかな…？ カプセルの周りにキラキラした破片がいっぱい散らばっていたの…。」

「あれが私のカラダ。本当の私。カラダが燃えちゃったから、私は消えるみたい。」

カプセルの周囲に散らばっていた破片。今頃は吹き出した熱水とマグマで形が保てなくなっているのだろう。

「悲しくないよ。」

つばめが、共鳴者の手に握られたカプセルを見つめながら話を続ける。

「私を作ってくれた人たちが、きっとそのカプセルを探してここに来る。アナタに託すから、そのカプセルを渡してあげてね。」

共鳴者が応じると、つばめは手を振りながら別れの言葉を告げる。

「じゃあね。アナタの旅も、人生も。大成功で終われますように…！」

つばめの姿が薄れ、消えてゆく。金色の粒子が散らばり、天に登ってゆく。彼女の魂は再び、お空と旅立ったのかもしれない。

少し離れた場所に、共鳴者が乗り込んでいた救命ボートが浮かんでいる。救命ボートに乗り込んで数時間ほど経過すると、一隻の中型船が近づいてくる。甲板には日本の国旗が掲げられている。船は救命ボートに近づいてきて、青い作業着を着た乗組員が共鳴者に声をかけてくる。

「お怪我はないですか！」

「今から助けますからね！ 大丈夫ですよ！」

共鳴者は乗組員たちに助け出され、救命ボートから船に移ることができる。温かい食事や毛布を提供される中。乗組員の一人が、共鳴者が持つカプセルを目にして話しかけてくる。

「あ…！ 信号を受信してこちらに来たのですが、まさかあなたが持っているとは。」

「そのカプセル、大事なもののなのです。」

「私達は海上保安庁やレスキュー隊ではなく、日本の宇宙開発機構です。あなたを見つけた経緯をお話させていただきますね。」

その後、共鳴者のロールプレイに応じながら以下の要素を話す。

- 共鳴者が持つカプセルは、日本で開発された彗星探査機「つばめ」のもの。
(この際、つばめの写真を乗組員が見せてくれるが、少女の姿ではなく一般的な宇宙探査機の姿をしている。)
- 「つばめ」は10年前に日本から打ち上げられた。彗星に着陸し、彗星の一部を回収、地球に彗星のサンプルを持ち帰ることがミッションであった。彗星の欠片には、地球最初の生命の起源となる物質が含まれている可能性がある。
- 「つばめ」は昨夜、カプセルをポイント・ネモに投下。その後、本体は大気圏に突入して燃え尽きてしまった。
- 大気圏突入後、不具合によってカプセルが発信されるはずの電波が途絶えてしまっていた。数時間前に、電波が復活して回収に向かったところ、共鳴者がいた。
- なお、昨日にこの辺りで海底火山の活動に巻き込まれた船舶の情報を得ている。共鳴者以外の被害者は、既に救助されている。

★ DL 向け情報

乗組員との会話終了後、エンドシーンへと移行する。共鳴者が海底で彗星探査機「つばめ」のアンテナを発見しているのであれば、エンド A となる。発見していないのであれば、エンド B となる。

エンド A：二人ぼっちの帰り道

乗組員から彗星探査機「つばめ」の話を聞いた共鳴者。ふと遭難中の出来事を振り返る。空から舞い降りた彼女は、遭難という極限状態幻覚だったのだろうか。

そう言えば、空から舞い降りた彼女の髪飾りそっくりなパーツを拾ってきた。思わずポケットに手を入れると、パーツが出てくる。

煤けたアンテナのようなパーツ。恐らくこれも彗星探査機「つばめ」の一部なのだろう。宇宙を旅し、彗星の欠片を地球に届けた彼女。このパーツは、彼女と共鳴者が手を取り合って帰還した証だ。

「見守っているからね。」

「アナタがお使いを終わらせるその日まで！」

どこかから、彼女の声が聞こえた。周囲を見渡しても彼女の姿は無いが、手のひらの上のアンテナが、キラリと輝いた気がした。きっと彼女はどこかで、共鳴者の人生という旅路を見守っていることだろう。

エンド報酬：彗星探査機「つばめ」のアンテナ

宇宙を旅し、彗星の欠片を地球に届けた彗星探査機「つばめ」のアンテナ。アナタも私のように、お使いを成功させて無事に帰ることが出来ますように！

使用すると一度だけ、〈マッピング〉の技能を4 DM \leq 8 で使用することが出来る。

永遠と広がる暗闇から

一人ぼっちで帰ってきた彼女

永遠と広がる大海原から

手を取り合って帰ってきたアナタ。

この先のアナタの旅路が

お星さまのように輝けますように。

エンド A：二人ぼっちの帰り道

FIN

エンド B：独りぼっちの帰り道

乗組員から彗星探査機「つばめ」の話を聞いた共鳴者。ふと、遭難中の出来事を振り返る。空から舞い降りた彼女は、遭難という極限状態幻覚だったのだろうか。

偶然にも空から落ちてきたカプセルを海面で拾い上げ、運よく助けが来ただけなのだろうか。全てが終わった今では、知る由もない。

無事に帰還した共鳴者は、人生という旅を続ける。いつか、使命や夢を成し遂げるため。

永遠と広がる暗闇から

一人ぼっちで帰ってきた彼女

永遠と広がる大海原から

一人ぼっちで帰ってきたアナタ。

この先もアナタは

孤独な旅を続けるのでしょうか。

エンド B：独りぼっちの帰り道

FIN

あとがき

このシナリオを手にとっていただき、ありがとうございました。誤字や伝わりづらい表現、読み苦しい点もあったかと存じますが、ご容赦ください。

作中の彗星探査機「つばめ」のモデルは、実在の小惑星探査機「はやぶさ」です。小惑星からサンプルを回収し、地球に届けた凄い探査機です。興味があれば調べて頂けると幸いです。

「はやぶさ」はミッションを達成した後、大気圏に突入して燃え尽きてしまいました。大仕事を成し遂げた後、地球に帰還しつつ散ってゆく。その様子から儚さを感じ、このシナリオの制作に至りました。

正直ストーリーやバックグラウンドを優先するあまり、TRPG としての遊びの幅は狭くなってしまいました。ダイスを振る場面も少なく、ほぼ一本道のシナリオです。ロールプレイ重視となっていました。そこは反省点ですから、次のシナリオ制作に活かしたですね。

ただ、シナリオのテーマや雰囲気は上手く出せたのではないのでしょうか。つばめとの会話の中で、共鳴者の深堀などに繋がれば幸いです。

それでは、次のシナリオでお会いしましょう。

▼ スペシャルサンクス

本シナリオの作成にあたり、力をお借りした方々の名前を掲載させて頂いております。ありがとうございました。

- いとこん様 X ID(@afrokne)
シナリオの超重要キャラ、「つばめ」の立ち絵を描き下ろして頂きました。
- ヨシュケイ様 X ID(@yoshukei_mini)
タイトル画像に用いた背景につきまして、素材をお借りいたしました。他にも素敵な素材をたくさん作っておられる方ですので、調べてみただけだと幸いです。

本シナリオについて

本作品の内容はフィクションであり、実在する歴史上の人物、団体、地名などとは一切関係がありません。

本作品は特定の思想、信条、宗教などを擁護あるいは非難する目的を持って書かれたものではありません。

エモクロア TRPG「二人ぼっちの帰り道」

発行日：2024 年 4 月 21 日

執筆：暁 けーな